

デザイナーのための経済コラム(69)

正常性バイアスNormalcy biasと認知バイアスcognitive bias

<https://ja.wikipedia.org/wiki/正常性バイアス>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/認知バイアス>

ウクライナ戦争、イスラエル・アメリカ・イラン戦争。ミャンマー内戦。人はどうして論争、喧嘩するのか、どうして事業に失敗するのか。どうして国は紛争を起し、戦争になるのか。ITの世界ではAI開発、データセンターの需要が急増し、それにとまって電力の供給が危惧され、犯罪もITの発達によって、巧妙になってきます。ますます先の読めない世界になっていくように思えます。世界を少しでも見通しのよいものにするとはできなくても、せめて、現状を限りなく客観的に認識することはできるのではないかと思います。しかし、それさえも実際には難しいことです。それができれば苦労はしないと言われるかもしれません。好奇心旺盛で冒険心あふれる人にとっては、だから人生は面白いと言われるかも知れません。

これまでに何度か行動経済学に関するテーマを取り上げて来ました。今回も、再度行動経済学を取り上げます。行動経済学のなかでも、核心となっているのが認識の仕方かと考えます。また、仏教の核心も認識ではなかったかと思えます。

心理学者は人が間違いをするのは「偏見」「錯覚」「先入観」「思い込み」「刷り込み」があるからと説明し、「認知バイアス」と呼んでいます。しかし、人類の長い歴史のなかで、蓄積された経験から、日常生活では無駄な思考や行動をしないために役に立っていることがあると言います。災害や犯罪の予防を研究している学者からは、「偏見」「思い込み」が被害を受ける要因にもなっていると言います。

行動経済学者はそれらの心理的な間違いを「正常性バイアス」と呼びます。事業で失敗する要因に「自分に都合のいい情報」だけを集め、判断し、「自分に都合の悪い情報」は無視し、排除してしまうことにあると言います。

<https://321web.link/optical-illusion/>

<https://www.bing.com/images/search?q=ルビンの壺&qv=ルビンの壺&form=IGRE&first=1>

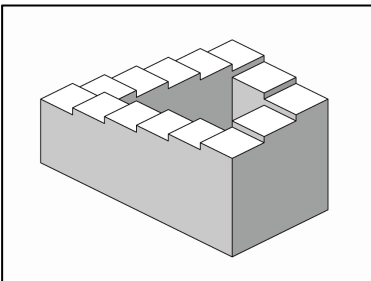


図1: ペンローズの階段
平面に描いた図形を立体にすると想像したものとは違う。

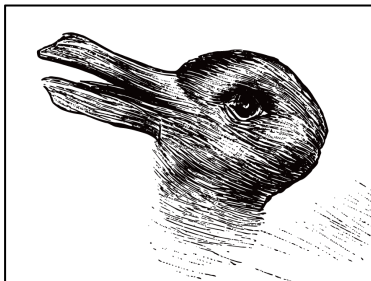


図2: ダッグ・ラビット錯視
左向きのあひるのくちばしが
右向きのウサギの耳にも見える。



図3: 老婆と若女
老婆の鼻と目が
若女の顎と耳に見える。



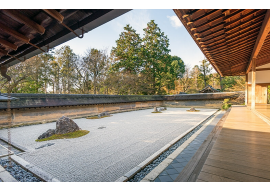
図4: ルビンの壺
白を地にすると黒い壺が、
黒を地にすると向かい合う
人の横顔が見る。

図1～図4は人間の視覚的な錯覚(錯視)を描いたものです。図1は2次元と3次元の混同から起きる錯視です。図2～図4は第一印象で見たものにとらわれて、別の物にも見えるかもしれないという可能性を放棄してしまうことによる錯視です。第一印象が正しいという思い込みが強ければ、強いほど、錯視から逃げられなくなります。主観、自己本位の発想、行動は間違いの大きな原因になる可能性があります。

石膏デッサンで習熟した人は無意識に「地と図」の関係を「周囲の空間と石膏像」「全体と部分」として見ながら描きますが、初心者は「図」「石膏像」ばかりに注目して全体のバランスを失っていきます。

東西、ことわざにも「地と図」の対比から教訓としているものや、認知バイアスを教えているものがあります。ヨーロッパのことわざ「他人の不幸は蜜の味(Schadenfreude)」、「勝者は歴史をつくり、敗者は文学を作る」、も訳されて日本のもののようにもなっているものもあります。日本には「岡目八目」、「思い込んだら命かけ」、「勝てば官軍、負ければ賊軍」、「聞いて極楽、見て地獄」、「捨てる神に拾う神」、「京の夢、大阪の夢」、「他人のいく裏に道あり花の山」、「井の中の蛙大海を知らず」など認識に関するものが多いです。

日本文化の根底には、「地と図」の関係を「間(ま)」として意識し、また、見立てとして、比喩アナロジーとしてモノやコトを認識しているものが多いのが特徴の一つだと思います。



竜安寺石庭



池坊・立花



夫婦岩

https://photo.mie-eetoko.com/spot/meotoiwa/#google_vignette

<https://www.ikenobo.jp/ikebanaikenobo/rikka/>

<https://garden-guide.jp/spot.php?i=ryuanji>

(T.K.)